

本能寺の変の心理学分析：明智光秀の心理に注目して

マネジメント学部4年 1160468 藤澤一矢

1. 概要と本論文の構成

本能寺の変を起こした明智光秀とはどのような人物なのか先行研究を元に調べ、心理学を用いた実験などを使いなぜ本能寺の変を起こそうとしたのかを分析するのが本研究の目的である。本論文ではまず、本能寺のいきさつと本能寺の変の理由を先行研究を元に取り上げる。次に、明智光秀とはどのような人物なのかを年表、人柄、立ち位置など様々な角度から先行研究を元に説明する。そのうえで、本研究の目的は、信長を襲った理由に関する先行研究の中から「怒り」という感情を取り上げ、その感情に関連した心理学の先行研究を参考に明智光秀の本能寺の変に至るまでの行動を考察することにある。

2. 本能寺の変とは

本能寺の変とは、1582年天下統一を目前に控えた織田信長が本能寺に宿泊している際に、中国地方に羽柴秀吉の援軍として向かっているはずの家臣の明智光秀に突然襲われ自害に追い込まれた事件のことをさす。この時本能寺に宿泊していた織田信長の軍勢は僅か数百前後であり、織田信長自身が奮戦して戦ったが100倍以上の明智光秀の軍勢1万3千に全く歯が立たなかった。その際、近くに織田信長の長男織田信忠が宿泊しており父信長を助けに数千の兵でむかったが間に合わず、その後二条城に立てこもった所を明智軍に包囲され城は落城、信忠は自害して果てた。

3. 明智光秀が本能寺の変を起こした理由に関する先行研究

先行研究では、明智光秀が本能寺の変を起こした理由に関して、以下の理由が主張されている。

- ・ 明智光秀は織田信長に攻められる長曾我部氏を助けるために兵を起こした。(金子、2014)

当時長曾我部氏は織田信長に攻められそうになっていた。光秀は、信長と長曾我部氏の橋渡しをしており、光秀と長曾我部氏は親密な関係にあった。また、長曾我部は光秀の家臣の親戚を妻にもっており本能寺の変の直前までやりとりをしていた。その関係性から長曾我部を助けるために兵を起こしたのではないのかと考える説である。

- ・ 明智光秀は徳川家康を殺すために向かったが裏切って信長を襲った。(明智、2013)

これは、信長は家康を殺そうと思っていたが長年同盟を結んでいた家康を理由もなく殺すのは世間体が悪いと思い、宿泊する本能寺にわざと少数できてそこに家康をおきびよせその後明智光秀に命じて本能寺を襲わせようとした。しかし、光秀に裏切られて襲われたというものである。証拠の一つとして明智光秀に襲われた際に是非に及ばずと信長がいったということが挙げられている。その後自分で自分の首を絞めたなど発言としており、この説のことを言っているのではないかととられている。

- ・ 明智光秀は信長にひどい仕打ちをされて恨んでいた。

(高柳、1986)

光秀は信長に他の家臣の前で何回も暴力を振るわれていた。他の人がいる前で暴力をふるわれるのは光秀にとって屈辱的であり、その仕打ちに耐えかねて犯行に及んだというのがこの説である。

- ・ 明智光秀は将来への不安を持っていた。(高柳、1986)

織田信長は、例え低い地位の家臣や外様の家臣でも能力を見込んだら出世させた。これは、当時の戦国時代には珍しい実力主義方式である。しかし、その反面手柄を上げない家臣は容赦なく切り捨てた。織田信長に30年仕えた筆頭家老佐久間信盛も手柄を上げなかったという理由で追放された。それを見ていた光秀はどんなに頑張ってもいずれ追放されると恐怖した。また自分が老齢なのに加え跡継ぎがまだ幼少である状況を見て明智家の将来を悲観し、信長を襲うしか自分の

助かる道はないと感じて犯行に及んだと思われる説である。その他にも朝廷や将軍に依頼されて殺した、他の家臣に濡れ衣を着せられた、演技のためにわざと襲ったなどがある。この中において、本研究では、将来への不安や信長への怒りとといった説に注目する。怒りや不安というものは誰も持っており、それが元に行動することが多い。明智光秀もその例外ではないだろう。そうなれば、さまざまな理由があるにせよ本能寺の変で織田信長を襲ったのは不安や怒りなど感情によるものと考えるのが妥当と考えこの点に注目することとした。

「背景要因について：明智光秀の生育歴」

これ以降は、「明智光秀 史料で読む戦国史(福島・藤田 2015)」を参考に明智光秀の生育歴を概説する。

4. 明智氏とは

明智氏は、室町時代将軍に仕える幕府奉公衆であった。美濃守護土岐氏の一族でありながら土岐氏と行動を共にせず、幕府にとっての脅威と位置づけられていた土岐氏をけん制する存在として室町将軍と深く結びついていた。その後も明智家は将軍からたびたびその軍事力を期待されてきた。

5. 明智光秀の前半生(1526年(1528年)明智光秀0歳—1567年明智光秀41(43)歳)

明智光秀の前半生は資料が少なく謎に包まれている。その中で判明しているのは以下である。若いころは美濃の斎藤道三に仕えていたが、斎藤家の動乱により明智家の人々は散乱し、光秀自身も諸国を放浪するようになった。その後、越前の朝倉義景に仕えるようになり(美濃を離れ朝倉家に仕えるまでの間細川藤孝に仕えていたという記述もありこの間藤孝が住んでいた京都にいた可能性が高いと考えられている)、越前滞在中に越前を訪れた足利義昭に側近として仕えるようになる。

6. 明智光秀の織田家中での立場

1568年光秀42(44)歳—1571年光秀45(47)歳

織田信長と足利義昭の二人の主君に仕える両属状態であり、

織田家中での立場は将軍の直臣ということもあり上位の地位に属していた。

1568年 織田信長と足利義昭の会見に尽力。その後上洛戦に従軍する。(当時足利義昭は越前の朝倉義景の所に滞在ししきりに上洛を催促していたが、中々腰をあげなかった。この状況を見ていた光秀はこの頃急速に力をつけてきた織田信長に目をつけ信長の力を背景に義昭を上洛させようと考えた。折しも信長の妻が光秀の親戚でありそのつてを頼りに信長と会うことに成功し上洛に協力する旨をとりつけた。一方信長も光秀の能力の高さを見抜き自分の家臣になるようにいった。)

1570年 朝倉攻めに従軍しその後近江の城を任される。信長は朝倉義景に将軍に挨拶するよう上洛を促すが義景は拒否しそれを口実に信長は義景を攻めるために兵を起した。その時光秀は足利義昭の名代として信長に従い従軍した。義昭の名代として従軍することで将軍も認めている戦という大義名分を得ることを狙った信長の思惑があつてのことと思われる。この戦は結局信長の義弟の浅井長政が裏切り敗退した。その後朝倉・浅井連合軍に対して城を守っていた武将が戦死した後任として城をまかされることになる。

1571年 比叡山攻めに従軍し恩賞として土地を与えられ坂本を本拠とする。比叡山攻めに従軍した光秀は比叡山跡地を恩賞として与えられ、織田家中の中で初めて一国一城の主となった。

1572年光秀46(48)歳—1574年光秀48(50)歳

足利義昭のもとを離れ織田家の新規部将として信長に仕えるが新参者として織田家中での地位は以前より低いものだった。

1572年 坂本城を築城する。

1573年 足利義昭と織田信長が対立しその結果、義昭が京都から追放される。その後京都代官として村井貞勝と共に京都の治政を担当する。(—1576)

1574年 大和の松永久秀が多聞城を開城した後の城代を担当する。これを機に大和と光秀の関係性が本能寺の変やその後の行動にまで大きく関わってくることになる。(その

後光秀は大和を支配するようになった筒井順慶を与力とし本能寺の変の後には羽柴秀吉と戦う際に味方になって戦うように依頼している。筒井氏は必ず味方になってくれるはずと光秀は考えておりそれが本能寺の変を起こす原因の一つになった可能性がある。) この頃光秀には京都周辺に領地を持つ幕府衆といわれる家臣団が形成しつつあった。

1575年光秀49(51)歳—1582年光秀56(58)歳

丹波攻めを任せその後国持大名になり織田家重臣としての地位を確立する。

1575年 丹波攻めを担当するようになる。(この頃柴田勝家は北陸担当(対上杉氏)、羽柴秀吉は中国担当(対毛利氏)と織田家重臣は地方攻略と取次を任されていた。)信長の推挙で惟任に改姓、日向守に任官され惟任日向守光秀と名乗るようになる。(同時に羽柴秀吉も筑前守に任官されており、信長の九州への関心を示すと同時に将来的にこの二人に九州を攻めさせようとする意図が見える。)京・丹波の境目にある威徳院に丹波攻めの成功を祈念し寄進している。威徳院との関係は1582年の本能寺の変の前に威徳院で読まれた有名な光秀の連歌のときまで続いた。

1576年 丹波の赤井直正が籠る黒井城を攻撃するが丹波最大の勢力である八上城主波多野秀治が裏切り大敗する。(当時織田信長は中国の毛利氏と対峙していたが、その中で播磨の最大勢力の別所氏が毛利側に寝返った。その後摂津を任せていた重臣荒木村重も裏切り、戦況は芳しくなかった。波多野氏は別所氏や赤井氏と親戚だったことから織田を裏切り毛利氏についた。このことは、奥丹波の地域が毛利氏についたことを意味した。)

1577年 丹波攻めの拠点として亀山城を普請する。本能寺の変前に明智光秀はここから出陣した。

1578年 八上城を本格的に攻撃する。付城を築城し孤立させようとする。(光秀は八上城を攻略するために八上城以外の全ての城を落とすことによって八上城を孤立させ、付城を作ることにより他からの援軍をこさせないようにした。)

1579年 八上城が降伏し丹波・丹後を平定する。恩賞として丹波国を与えられる。

1580年 丹波経営に着手丹後の細川氏・一色氏また佐久間信盛の失脚により信盛の支配下にあった大和の筒井氏を与力とし摂津衆にも影響力を及ぼすようになり重臣筆頭とも言える地位を確立する。(丹後の細川氏は光秀と親戚関係にあたり、光秀と細川藤孝は親友といってもいい間柄であり光秀の最も頼りとする一人であったことは間違いない。事実本能寺の変直後に細川氏に協力して欲しいと依頼している。拒絶されたあともそれに対して怒らず泣き言ともとれる書状をだしている。光秀としては他はともあれ細川氏は味方してくれると感じていたのではないかと考察する。筒井氏と同様細川氏との親密さも本能寺の変を起こす原因の一つになった可能性がありこのことが光秀の最大の誤算だったと考察する。)

1581年 西国出陣に関連して軍法を制定した。

1582年 武田攻めに従軍(その後武田攻めの祝勝会での宴会で信長に暴力を振るわれた可能性あり)。安土を訪れた徳川家康をもてなす接待役を命じられる(その際接待するための料理に不手際があり信長に暴力を振るわれた可能性あり)。その後接待役を解任され中国地方にいる羽柴秀吉の援軍に行くように命じられる。(その際今までの領土を没収し代わりに毛利の領土を与えると信長に命じられた可能性あり)。威徳院で連歌を催す。亀山城を出発したが進行速度は遅く、中国へ行く道と京都に行く道の境目で突然敵は本能寺でありと発言し(明智軍の兵士は後に家康を殺すために本能寺に行くと思っていたと書いている)、本能寺に泊まっている信長を襲った。その後、山崎の戦いで羽柴秀吉に敗れ坂本城に逃げ帰る途中、落ち武者狩りにあい死亡した。(死については首実験の際に誰のものから分からなかったため天海説を始め諸説存在する。)

これらのことから光秀の織田家中での地位は両属時代で得ていた地位を織田家の新規部将となることで落とすことになった。その後短期間で地位を上げ、織田家中での最大での出世頭の羽柴秀吉と同等の地位まで上り詰めたことがうかがえる。国持大名になるまでは、他の織田武将と共同で書状を出していたが国持大名になることで独自に書状を発行できるようになった。光秀は室町時代での格式が光秀よりも上

位の細川氏を与力としていたが、書状を出すときは自分よりも上位の人に送る様式を用いており、室町時代の格式が上の細川氏に敬意を示し室町時代の家格を重視していると考察する。

7. 明智光秀の人物像

・家臣に気遣いできる優しさ

傷を負った家臣を見舞ったり、薬を与えたり家臣が亡くなった際に命日に埋葬した寺に寄進したという出来事が書状で

調査対象者 大学生 20名に配布 22名から回答を得た。

・ 信長に対する恩義と織田家中に対する気配りによる忠誠心の高さ

本能寺の変の前年、信長・光秀の西国出陣に関連して光秀の家中に対しての軍法が作られた。結局光秀・信長の出陣は見送られた。その軍法の最後の部分に低い地位から信長に引き立てられて高い地位に上がったことに感謝し子孫代々に至るまで信長に受けた恩を忘れてはいけなさと記すなど信長への感謝の気持ちを記している。(また、興味深いものとして、家臣に対し信長の直臣や家臣に対して配慮を示すように書かれてある。これは、以前信長の重臣である柴田勝家が領地を与えられた際に信長にいる方向に足を向けて寝てはいけない、信長を敬うことを忘れてはいけないという信長の発言を考慮して書かれたものと考えられる。)

8. 心理学な観点から光秀に注目する点

本研究では、光秀が本能寺の変を起こした理由の中で、怒りや不安といった光秀の感情について注目するとしたが、その中でも特に怒りに注目することとする。そこで本研究では、怒りについての先行研究を通じてその結果を光秀の行動と照らし合わせることにより、光秀が怒り感情によって信長を襲った可能性について考察する。以下では(日比野・湯川、2003)を先行研究として詳しく説明した後、彼らの知見を元に明智光秀の行動について考察することとする。

9. 怒りをテーマにした心理学実験の先行研究

「怒り経験とその鎮静化過程」

(湯川・日比野2003)

目的 怒り経験と経験後の感情とそれを処理するための行

動を抽出すること、そして、感情と行動の関係を調査することであった。

予備調査

目的 怒り経験に加え、経験後に生じる感情と行動を抽出することであった。具体的には、実験参加者に対して日常生活における怒りの場面を想像させた。

質問紙の内容 1 怒り場面、2 怒り対象、3 感情の変化、4 怒り緩和行動、5 怒り増幅行動の5つに答えさせた。

結果と考察

1 怒り場面では、自分勝手、侮辱、不当な強制、迷惑行為の場面の頻度が全体の過半数を超えて特に典型的な特に怒りを感じやすい場面だった。

2 怒り対象では、関係が深いほど比較的怒りを感じやすく、関係が浅いほど比較的怒りを感じにくいと考えられる結果が出ていた。

3 感情の変化では、怒り経験時は、怒りだけではなく抑うつや驚愕の感情を喚起していることが調査された。これらの感情の変化の頻度は怒り100%、抑うつ30.3%、驚愕15.2%だった。また、生起順序では驚愕が怒りや抑うつよりも先に喚起していることが調査された。

4 怒り緩和行動を調べた結果7つのパターンが抽出された。

5 怒り増幅行動を調べた結果5つのパターンが抽出された。

本調査

目的 怒り経験後の感情と行動を個人的要因を含めて検討することであった。そのために、個人的要因—怒り経験—行動という流れの因果モデルを想定した。

質問紙の構成 1 怒り経験とその鎮静化過程と2 パーソナリティ特性・その他の2部構成であった。

調査対象者 大学生136名に実施。最終的に118名の回答を調査対象とした。

結果 怒りの場面で不当な強制が他の場面と比べても少ない調査が出ていた。その理由として怒り対象が友人で会ったということ強制されていてもそれを強制とらえなかったことが原因と思われた。また、特性的に怒りやすいほど、また悪意を感じるほど被害感(特に心理的被害感)を強く抱き

やすく、強い被害感を抱くほど驚愕・怒り・抑うつといった感情を喚起しやすいことが示された。また、種類や行動によって驚愕は攻撃以外の感情表出、怒りは主に攻撃、抑うつは思考回避につながると示された。

10. 考察

湯川・日比野(2003)において注目すべきは特性的怒りである。今回の調査で特性怒りは、主に悪意の知覚や被害感を高めていた。同じようなことに関して相手の悪意を知覚したり被害感を強く抱いたりしやすいと考察する。また、彼らの研究の結果、特性的怒りが高いほど忘却を行いやすいことが明らかになった。その結果、ネガティブな感情経験が積み重なり別の機会に怒りを喚起しやすいと考えられる。湯川・日比野(2003)に基づくと、明智光秀が織田信長を襲った原因に関して、以下のように考察することが出来る。明智光秀は、織田信長に暴力を振るわれていたが、そのたびに暴力を振るわれたことを忘却、信長から受けた恩、趣味に没頭することで意図的に怒りを忘れようとした。軍法に書かれていた信長への感謝もそういったことの一つだろう。しかし、本能寺の変の直前、織田信長から突然今まで光秀が持っていた領地を全て没収してまだ敵方だった領地を与えるといわれている。当時光秀は、織田家中でもトップとも言っていた地位にいたが秀吉との派閥抗争に負け、地位が落とされるトップの地位から落とされることがほぼ確定的だった。趣味の連歌を読むことによって信長への怒りを忘れようとした光秀だったが、今までと違い苦労して治めてきた領地の突然の没収と確定的ではない新領地、今までの地位からの陥落それによる将来への不安など懸案要素が多すぎた。それでも、信長に謀反しようとは考えてなかつただろうが、その当時織田信長を襲いやすくなっていた状況や家臣からのたきつけ(光秀の重臣斎藤利光は長曾我部氏と親戚関係にあり本能寺の変の直前まで連絡をとりあっていた。そのため長曾我部氏を助けるためにたきつけた可能性がある。)により怒りがこみ上げ、徐々に謀反を考え始めたのではないか(進軍が通常よりも遅いもそれが一因の可能性あり。)だが信長を襲うかを最後まで悩んでいた。しかし、たびたびの仕打ちや今回のこ

との大きさに怒りを喚起しやすくなっていた光秀はついにその怒りを抑えきれず信長を襲ったのだろう。(その当時の状況から見て信長を倒すことで成功するという突発的で短期的戦略しか考えていない可能性が高いと考える。そうと考える理由の一つに信長を襲った際に近くにいる長男の信忠を襲わなかったことがあげられる。当時信忠は数千の兵を持っていたが、同時に襲わなければ逃げられる可能性があった。当時信長の権力は絶対だったが家督をすでに信忠に譲っており尾張・美濃を譲り受けていた。信長自身も信忠の才覚を認めており仮に信忠が生き残った場合、信長を襲った後の成功(光秀が生き残る)確率が格段に落ちていた可能性が高いと考えられる。)

この考察が先行研究で挙げられる本能寺の変の原因の理由と異なるのは、光秀がただ怒りや不安を覚えて突発的に襲ったのではない。まず、今回の調査で調べた本能寺の変を起こした理由の先行研究で挙げられた理由が怒りや不安を増幅させた。それによって光秀は冷静さを保ち続けることが難しくなり、正常な判断が出来なくなってしまう。そして、リスクを過小評価、リターンを過大評価し光秀自身が意図的に信長を襲うような決断をするように誘導したと考慮したことである。

11. 今後の課題

仮にこのように光秀が行動した場合、光秀は特性的怒りが高いと生じる行動をとってはいるが、光秀の人物像を全体的に見た場合、根拠として表すためには証拠が少ない。本研究の考察が正しいと示すためには、彼の性格に対してはさらなる調査が必要である。

12. 引用文献

- ・ 明智憲三郎 (2013). 本能寺の変：431年目の真実 文芸社
- ・ 藤田達生・福島克彦 (2015). 明智光秀：史料で読む戦国史 八木書店
- ・ 金子拓 (2014). 織田信長(天下人)の実像 講談社
- ・ 高柳光寿 (1986). 明智光秀 吉川弘文館
- ・ 湯川進太郎・日比野桂 (2003). 怒り経験とその鎮静化

過程 心理学研究, 74, 428-436.